日本中國學會報　第七十二集
二〇二〇年十月十日　發行　抜刷

「明月璧」と高野蘭亭

高山大毅

「明月璧」と高野蘭亭

高山大毅

一．はじめに――『唐詩選』をめぐって

『唐詩選』は、服部南郭の校訂による和刻本が出版されて以來、唐詩の定番の選集として日本では現在に至るまで讀まれ續けている。[1] 三百年に及ぶ日本での受容の歴史の過程で、『唐詩選』の讀まれ方にも當然變化はあった。

現代とは異なる、江戸中期の『唐詩選』受容の大きな特徴としては、該書が編纂者とされる李攀龍の諸作とともに讀まれていたことが擧げられよう。たとえば、「草色秋迷彭蠡澤、不知何處弔番君（草色秋迷ふ彭蠡の澤、知らず何れの處にか番君を弔はん）[2]」という李攀龍の詩句は、『唐詩選』所收の「日落長沙秋色遠、不知何處弔湘君（日落ちて長沙秋色遠し、知らず何れの處にか湘君を弔はん）[3]」という李白の詩句を明白に下敷きとしている。このように李攀龍の詠作と『唐詩選』を照らし合わせることで、當時の讀者は、李攀龍の詩を解釋し、古文辭派の作詩の手法を學んだのだと考えられる。

『唐詩選』は僞作説があるものの、李攀龍の眞作とされる『古今詩刪』の唐詩の部と收錄詩が大部分重なっており、李攀龍の好尚を反映した選集といえる。よって、李攀龍の詩を解釋するに當たって、李攀龍が材料とした詩を『唐詩選』に求めるのは間違いではない。熊阪台州『白雲館近體詩眼』は、『唐詩正聲』には收錄されないが『唐詩選』に採られている詩は、李攀龍の好みに適い、彼が作詩の參考にした詩であることを具體例を擧げて論證している。[4]

ここで考えたいのは、江戸中期の人々が、李攀龍の詩を解釋するために『唐詩選』を參照するだけでなく、逆に『唐詩選』を解釋する際に、李攀龍の詩を參考にすることもあったのではないか――ということである。明確に意識していなくても、李攀龍の作品を記憶していることで、唐詩の解釋がそれに引きずられることもあったろう。李攀龍の詩が唐詩解釋に影響を及ぼしていると思われる例は實際に存在する。

徂徠の弟子である入江南溟の『唐詩句解』は、『唐詩選』の楊炯「夜送趙縱（夜趙縱を送る）」に對していささか奇妙な解釋を施す。詩の本文は次の通りである。

趙氏連城璧　趙氏連城の璧
由來天下傳　由來天下 傳ふ

送君還舊府　君が舊府に還るを送れば
明月滿前川　明月 前川に滿つ[5]

起句では旅立つ趙縱の姓にちなんで、戰國時代の趙の寶物であった「連城璧」の故事が用いられている[6]。趙の惠文王は「和氏之璧（和氏の璧）」を有し、秦の昭王は十五城と璧を交換することを願った（「連城」の稱の由來である）。璧を奉じて秦に赴いた趙の藺相如は、秦が約束を履行せず、力に物を言わせて璧を奪おうとしていることを察し、應變の措置で璧を國に戻した――という故事である。この詩では、趙縱の才德を「連城璧」に比している。

問題は、結句の「明月」の解釋である。南溟の『唐詩句解』は、「明月」に注して次のようにいう。

鄒陽書、「明月珠夜光玉」（ママ）、借明月復比趙德輝而照題「夜送」[7]。

鄒陽が書、「明月の珠夜光の玉」。明月を借りて復た趙が德輝に比す。而して題の「夜送る」に照らす。

南溟は「明月」を單に明るい月であるとは解さず、鄒陽の上書が典故であると見る。鄒陽の上書は後引の詩とも關連するので、原文を引いておこう。

臣聞明月之珠夜光之璧、以暗投人於道、衆莫不按劍相盻者。何則無因而至前也[8]。

臣 聞く明月の珠夜光の璧、暗きを以て人に道に投ずれば、衆 劍を按じて相盻（みな）ざる者莫し。何となれば則ち因ること無くして前に至ればなり。

闇夜に光り輝く寶物を人に投げつけたならば、投げつけられた人は誰でも劍に手をかけてにらむであろう――鄒陽はこの比喩を引き合いに出すことで、貧賤の士は傑出した人物であっても、事前に彼を君主に紹介する人がいなければ、君主に憎まれてしまうと說いた。南溟によれば、結句はこの故事を踏まえており、「明月」は夜空に輝く月を指すだけでなく、趙縱の「德輝」をも喩えているのである。

もっとも、この南溟の解釋に對しては批判もあった。戸崎淡園『箋註唐詩選』は、「已用趙璧又用明月珠。繁雜可厭也。恐非楊之本志也（已に趙璧を用ひ又明月の珠を用ふ。繁雜 厭ふ可きなり。恐らくは楊の本志に非ざるなり）[9]」と論じる。人の才德を寶玉に喩える表現を起句と結句で繰り返し用いるのは繁雜であるという指摘は一定の說得力がある。『唐詩句解』に關しては、「徠翁ノ沒後閒モナケレハ、親炙ノ諸君モ多ク、ミナ句解ノ疵瑕ヲ指摘嗤笑シテ見ル者モ無カリシ[10]」という惡評が傳わっており、これも杜撰な注釋の一例のように見えなくもない。

しかし、李攀龍の次の詩句（「重別魏使君（重ねて魏使君に別る）」の起承句）が南溟の念頭にあったと考えるとどうであろうか。

君家明月楚江干　君が家の明月 楚江の干
價動連城海色寒　價は連城を動かし海色 寒し[11]

楊炯の作と同じく「明月」「連城」の語を用いた送別詩であり、「趙氏

〜」「君家〜」という表現も似ている。この句が楊炯の詩に基づく可能性は高い。

徂徠の明詩注釋である『絕句解』は、起句の「明月」を「明月珠」の意であるとし、「順甫楚產。隋侯珠亦楚地事。故曰君家（順甫は楚產。隋侯の珠も亦た楚地の事。故に君が家と曰ふ）[12]」という。徂徠の說にしたがえばこの二句は、あなたの家の明月の珠は楚の川邊のもので、その價値は竝んだ城を動かすほどであり（魏裳〔字は順甫〕の優れた人品は朝廷から一郡數十縣を任されるほどであり）、彼の任地の海邊の景色はさえわたる――と解釋できる。

李攀龍の詩の「明月」が「明月珠」を指すのならば、それを楊炯の詩に遡らせて同樣の解釋を行うことは不思議なことではない。むしろ『唐詩選』を李攀龍の『唐詩選』として讀むのならば、有力な解釋であるとさえいえよう。

二．「珠」「璧」の連結表現

（一）「珠」と「璧」

問題はさらにその先にある。前引の李攀龍の詩では、魏裳を喩える「明月珠」は「連城」の價値があるとなっていた。しかし、もともと「連城」の故事に登場した寶物は「和氏之璧」であり、李攀龍は「珠」と「璧」を混同しているように見える。「珠」は眞珠などを指すのに對し、「璧」は平たい輪の形をした玉器を指し、兩者は本來異なっているはずである。

李攀龍は他の詩（「寄茂秦（茂秦に寄す）」）でも、「珠」と「璧」の區別を無視した表現を用いている。

誰惜虞卿老去貧　誰か惜まん虞卿 老い去りて貧しきを
平原食客一時新　平原の食客 一時新なり
懷中白璧如明月　懷中の白璧 明月の如し
何處還投按劍人　何れの處か還りて投ぜん劍を按ずるの人[13]

李攀龍は、謝榛（字は茂秦）が宗室の趙王の食客であったことから詩想を展開し、彼を戰國時代の趙に仕えた虞卿に擬する。虞卿は遊說の士で、趙の孝成王に入說し、一度目の會見で「黃金百鎰、白璧一雙[14]」を賜り、二度目の會見で上卿に任ぜられた。起句は、謝榛が虞卿とは異なり、不遇をかこっていることを述べる。承句も趙からの連想で、趙王を趙の公子で多くの食客を擁した平原君になぞらえ、昔の食客が趙王の下にいないことをいう。轉結句は、前引の鄒陽の上書を典故に用い、謝榛が「明月」のように輝く「白璧」（＝才能）を有しているのにもかかわらず、それを受け入れてくれる人がいないことを歎いている。轉句の「懷中」は『老子』の「被褐懷玉（褐を被り玉を懷く）[15]」に、また「白璧」は虞卿が下賜された「白璧」にも連關する表現であり、「璧」「玉」にまつわる複數の故事が巧みに組み合わされている。古文辭派はこのような共通點のある典故を連結させる技法をしばしば用いた[16]。「珠」「璧」を區別しない表現も、その一つと見ることができる。

しかし、この詩の表現には批判もあった。太宰春臺は次のように說く。

且白璧玉也。明月珠也。曰「白璧如明月」、造語誤矣[17]。

且つ白璧は玉なり。明月は珠なり。「白璧 明月の如し」と曰ふは造語 誤れり。

「明月珠」の「明月」を「白璧」に對して用いるのは「造語」の誤りであると春臺は說く。「珠」「璧」を區別しない李攀龍の表現は春臺にとって受け入れ難いものであった。

ここで「珠」「璧」の故事について整理しておきたい。「珠」「璧」は典籍の中で竝んで登場することが多く、兩者の關係については、『文選』李善注においても既に議論されている[18]。

班固の「西都賦」に、「隨侯明月、錯落其閒《中略》懸黎垂棘、夜光在焉（隨侯明月、其閒に錯落たり《中略》懸黎垂棘、夜光 在り）」という一節がある（「懸黎垂棘」は美玉の名で、『左傳』などには「垂棘之璧（垂棘の璧）」とある）。「隨侯」「明月」「夜光」の關係が解釋上論點となる。李善注は、『淮南子』の高誘注の「隨侯之珠、蓋明月珠也（隨侯の珠、蓋し明月の珠なり）」という說、及び同書の許愼注の「夜光之珠有似明月。故曰明月也（夜光の珠 明月に似たる有り。故に明月と曰ふなり）」という說を引く。高誘の說は、「隨侯之珠」＝「明月珠」、許愼の說は「夜光（之珠）」＝「明月（珠）」となる。李善注によれば、班固は「隨侯明月」と「夜光」を切り離していることから、「隨侯明月」は「夜光」ではないと認識しており、班固の見方は、「夜光（之珠）」＝「明月（珠）」とする許愼の說と食い違う。これについて李善注は、「夜光」に關する詳しい記載が「經典」にないために起った齟齬であるとし、「夜光」は「璧」・「珠」のどちらに對しても用いられることを具體例を擧げて示している。

この議論の重要な點は、「明月」は「珠」の稱であることが自明視されていて、「明月」が「璧」を修飾する可能性は顧慮されていないことである。

ただし、「珠」「璧」を連結させた表現に先例が全くないわけではない。李白の詩に「白璧雙明月、方知一玉眞（白璧雙明月、方に知る一玉の眞なることを）」[19]とある。しかし、朱諫『李詩選注』は「蓋白璧是玉、明月是珠。上下辭意不相照應（蓋し白璧は是れ玉、明月は是れ珠。上下の辭意 相照應せず）」[20]と評し、この詩が李白の作であることに疑義を呈している。やはり「珠」「璧」の混用には相當の違和感が伴うのである。

「珠」「璧」を區別しない李攀龍の表現の際たるものに、「明月璧」がある。李攀龍「雪溪徐山人（雪溪の徐山人）」に次のようにある。

不投明月璧　明月の璧を投ぜず
甘隱大雷山　甘んじて隱る大雷山[21]

この「明月璧」の語の用例は非常に少ない。『四庫全書』を含む膨大な文獻を收錄する「中國基本古籍庫[22]」を檢索しても、宋代以降の用例しか見つからない。宋末から元初にかけての三つの別集（林景熙『霽山集』・黃庚『月屋漫稿』・張觀光『屏巖小稿』）に「有如明月璧、美價傾鴻都（明月の如き璧有り、美價 鴻都を傾く）」という同一の詩句が見え（重出の理由は不明である）、元人郭經の詩に「孤電繞手明月璧（孤電 手に繞ふ明月の璧）」とある（『陵川集』卷八）。詩における明代より前の時代の用例はこの二例に止まり、「如」字を伴う前者を除外すればたった一例となる。明代に入ると、絕對數は少ないものの用例は增える。

李攀龍『滄溟集』一例
羅洪先『念庵文集』一例
佘翔『薜荔園詩集』一例

王世貞『弇州四部稿』三例
吳國倫『甔甀洞稿』四例

李攀龍・王世貞・吳國倫は盟友關係――いわゆる後七子――であり、また佘翔の詩風は彼らの詩風と近いと評される。[23] 李攀龍・王世貞などいわゆる明代古文辭派は、言々句々唐詩を模倣したと思われがちである。しかし、實作に卽してみると、彼らは「明月璧」のように唐詩には見られない特殊な表現を用いているのである。[24]

從來、古文辭派の文學は「擬古主義」や「復古主義」といった語で括られてきた。しかし、典故の連結表現――とりわけ「明月璧」のような典故の壓縮といっても良いような表現――には「擬古」や「復古」からはみ出す彼らの文學の特色が表れている。「擬古」や「復古」といった便利な言葉に賴らず、この種の表現が切り拓いた詩境の文學史上の位置について考えていくべきであろう。

(二) 江戸漢詩における「珠」「璧」の連結表現

徂徠學派は李攀龍らの影響を受け、「珠」「璧」を連結した表現を用いた。

還投白璧似明月　誰道今無按劍人[25]
還た投ず白璧の明月に似たるを　誰か道ふ今劍を按ずる人無きと

隙過白馬驍騰色　影沒明珠十五城[26]
隙は過ぐ白馬驍騰の色　影は沒す明珠十五城

前者は徂徠の弟子で大名の本多猗蘭、後者は徂徠學派第二世代に屬する石島筑波の詩の一節である。少し變わった例には、秋元澹園が嵐山に住む入江若水を詠んだ詩がある。この詩では、「連城」を城闕の意で用いており、「明月」と「連城」は緣語のような關係になっている。[27]

聞說君家接帝京　聞說く君が家は帝京に接すと
握中明月照連城　握中の明月 連城を照らす
城頭那得無秋色　城頭 那ぞ秋色無きことを得ん
作賦須成潘岳名　賦を作りて須く潘岳が名を成すべし[28]

「明月（珠）」を修飾するのに「握中」の語を用いるのは、「握中明月誰相貴（握中の明月誰か相貴ばん）」[29]という王世貞の表現に基づいている。

徂徠學派に限らず、李王の影響を受けた木門の詩人にも同樣の表現は見られる。新井白石と室鳩巢の用例を擧げる。

朱絃堪奏陽春曲　白璧難酬明月輝
朱絃 奏するに堪ふ陽春の曲　白璧 酬ひ難し明月の輝き[30]

始信英材能照國　何須明月購連城
始めて信ず英材 能く國を照らすを　何ぞ須ひん明月 連城を購ふを[31]

「明月璧」に關していえば江戸漢詩においてもその用例は稀であり、管見の及ぶ範圍でこの語を複數回用いているのは高野蘭亭（『蘭亭先生詩集』七例[32]）、横谷藍水（『蘭水詩草』二例[33]）のみである。藍水は蘭亭の門下なので、藍水の二例には蘭亭からの影響があろう。蘭亭の用例を

いくつか引いておこう。

即懐明月璧　即ち懐く明月の璧
按劍總堪疑　劍を按じて總て疑ふに堪えたり[34]

一抱誰高明月璧　一抱誰か高し明月の璧
三盃應醉玉壺氷　三盃應に醉ふべし玉壺の水[35]

爲汝便探明月璧　汝が爲に便ち探る明月の璧
暗投何必待先容　暗に投ずるに何ぞ必ずしも先容を待たん[36]

蘭亭の七例は少ないと思われるかもしれない。しかし、中國の別集における最多の用例數が吳國倫『甔甀洞稿』の四例であったことを考えれば、蘭亭の用例數は際立っている。

ちなみに高野蘭亭は、「明月抱連城（明月 連城を抱く）[37]」「明月千秋懸趙璧（明月千秋 趙璧を懸く）[38]」といったように、「明月璧」以外にも、「珠」「璧」を連結した表現をたびたび用いている。

三　「明月」の詩人

（一）蘭亭と「明月珠」「連城璧」

なぜ、蘭亭は多く「明月璧」の語を用いるのか。それは彼の閲歴と關係している。

蘭亭は十七歳頃に視力を失い、徂徠の助言にしたがい、詩人として一家を成すことを志した。『徂徠集』に見える蘭亭宛ての詩は一首のみで、蘭亭の失明に觸れている。

多病學詩詩已成　多病詩を學び詩 已に成る
沈吟何妨喪雙明　沈吟 何ぞ妨げん雙明を喪ふを
且言徑寸珠無恙　且つ言ふ徑寸珠 恙無し
論價還堪十五城　價を論ずれば還た十五城に堪へたり[39]

起承句は、蘭亭は多病でありながら詩を學び、詩はひとかどのものになった。失明したことは詩を作る上で妨げとはならない――といった意味である。轉句の「徑寸珠」は、「隨侯之珠」＝「明月珠」を指す。「隨侯之珠」は、隨侯が傷ついた蛇を助けたところ、蛇が恩に報いるために銜えてきた珠であると傳承されている。その珠の大きさは「徑寸」（直徑一寸）であった。

蛇銜明珠以報之。珠盈徑寸、純白、而夜有光明如月之照可以燭室。故謂之隋侯珠、亦曰靈蛇珠。又曰明月珠[40]。

蛇　明珠を銜みて以て之に報ふ。珠は徑寸に盈ち、純白にして、夜　光明有ること月の照らすが如くにして以て室を燭らす可し。故に之を隋侯の珠と謂ひ、亦た靈蛇の珠と曰ひ、又明月の珠と曰ふ。

結句は、蘭亭が入門した時に徂徠が蘭亭を「連城璧」と目したことを踏まえる。この話は、松崎觀海「東里先生壽藏記」と藤山惟熊「東里先生墓誌銘」のいずれにも見え、蘭亭の人生において重要な出來事であった（「東里」は蘭亭の別號である）。

夫子奇之目以才抵連城。[41]
夫子 之を奇として目するに才 連城に抵(あ)たるを以てす。

先生初見奇之、目以趙璧抵連城。[42]
先生 初めて見て之を奇とし、目するに趙璧 連城に抵たるを以てす。

つまり、轉結句は、失明してもあなたの「明月珠」(＝才智)は損われず、その價は變わらず十五城に匹敵するほどだ――といった内容であり、徂徠は「明月珠」「連城璧」の典故を連結して用い、蘭亭の不運を慰めたのである。

蘭亭が徂徠に贈った詩にも同様の表現が用いられている。

曾向荊山抱璧歸　曾て荊山に向かひて璧を抱きて歸る
懷中明月帶光輝　懷中の明月 光輝を帶ぶ
應憐此日陵陽淚　應に憐むべし此の日陵陽の涙
更說連城識者稀　更に說く連城識者 稀なりと[43]

承句の「明月」は「明月珠」を指し、起句と轉結句は「卞和泣玉」を典故とする。[44]「連城璧」は別名「和氏之璧」であり、發見者の卞和の名にちなむ。卞和は荊山において璧の原石を發見し、楚の厲王と武王に獻上したが、信用されず、足斬りの刑に處せられて兩足を失った。三度目の獻上で原石の價値は認められ、卞和はその功績によって「陵陽侯」に封ぜられたものの、それを辭退した。轉句の「陵陽淚」は、卞和が自らが足斬りの刑に遭ったことよりも、玉の眞價が認められないことを嘆いて泣いたことを踏まえる。つまり、轉結句は、「明月珠」「連城璧」になぞらえられる自己の才能が世に認められないことの悲嘆を述べている。この詩でも「珠」「璧」は區別されていない。

このようなやり取りを通じて、蘭亭は「明月珠」「連城璧」の連結表現に深く愛着を懷くようになり、「明月璧」という奇語を自己の詩で用いたのであろう。

蘭亭を「連城璧」「明月珠」に比した徂徠の言葉と詩は、渾名を付けるような一種の名付けであると見ることもできる。徂徠の門弟に對する名付けについては、安藤東野の事例が參考になる。徂徠は、安藤東野に「東璧」という字を與えており、命名の理由について次のように說いている。[45]東野の家は三代にわたり亥年生まれであり、亥の方角にある星辰の「東璧」は圖書を象徵し、詩文に秀でた東野は「東璧」の「精」があつまって生まれたと思われるので、「東璧」は彼の字に相應しい――と。

東野が早世した直後に書かれた徂徠の書簡には次のようにある。

去明十三日、藤煥圖遂下世矣。渠十年來時時嘔血。自謂吾終當從李賀之後、繼天上白玉樓記也。人咸笑、文人傲誕迺爾。何其信然。及病篤飲啖若平生。十二日、不佞往視、則相顧曰、「歲在大淵獻、吾歸東璧之期至也。世心世肝既已嘔盡」。辭氣壯甚。渠蓋記不佞所爲字說中語云爾。[46]

去明十三日、藤煥圖(安藤東野)遂に下世す。渠(かれ)十年來時時嘔血す。自ら謂へらく吾 終に當に李賀の後に從ひて、天上白玉樓の記を繼ぐべきなりと。人 咸(みな)笑ひ、「文人の傲誕 迺(すなは)ち爾り。何ぞ

其れ信に然らん」と。病篤きに及ぶも飲啖平生の若し。十二日、不佞往きて視れば、則ち相顧みて曰く、「歳は大淵獻に在り、吾東壁に歸るの期至るなり。世心世肝既已に嘔き盡くす」と。辭氣壯なること甚し。渠蓋し不佞の爲る所の字説中の語を記して爾云ふ。

歿する前日に、東野は徂徠に「今年は亥年で、私が東壁に歸る時がやって來たのです。俗人としての心肝は喀血で既に吐きつくしました」と述べたという。臨終の床で東野は、師から與えられた名にちなんだ物語に自己を託していた。尊敬する師の名付けは、弟子たちにこれほどに重い意味を持ったのである。

蘭亭は自己の居宅を「明月樓」と命名した。典據は庾亮が武昌の南樓の上で下僚とともに明月を眺めて樂しんだという故事であろう。[47] さらにこの稱は「明月珠」「連城壁」の連結表現を意識していたと考えられる。「明月樓」での蘭亭の作には次のようにある。

懷裡難投明月璧　懷裡投じ難し明月の璧
詞場先動碧雲吟　詞場先づ動く碧雲の吟[48]

明月空懷和氏璧　明月空く懷く和氏の璧
陽春重唱郢人篇　陽春重ねて唱ふ郢人の篇[49]

「明月樓」の名は、蘭亭と「明月珠」「連城壁」の連結表現の關係を一層堅固にしたといえよう。

(二) 高野蘭亭と秋山玉山

蘭亭は「明月珠」「連城壁」の連結表現に格別の思い入れを有していた。しかし、彼はこの表現を自己にのみ用いたわけではない。旗本で太宰春臺門の土屋繩直に對して「連城明月懷和璧（連城明月 和璧を懷く）[50]」といった表現を蘭亭は用いており、また肥後細川家の儒者である秋山玉山の詩集に寄せた古詩には次のようにある（この詩は『玉山先生詩集』の巻末に掲載されている）。

一握明月夜光璧　一握明月夜光の璧
高價誰當十五城　高價誰か當たらん十五城
異代詩名長不朽　異代の詩名長へに朽ちず
吟來擲地金石聲　吟來地に擲てば金石の聲[51]

「高價誰當十五城」の句は、徂徠が蘭亭に贈った詩の「論價還堪十五城」を思わせる。この句には、玉山は自己に匹敵する詩才の持ち主であるといった含意があったのかもしれない。

秋山玉山の「明月珠」「連城璧」の連結表現に對する態度は興味深い。『玉山先生詩集』『玉山先生遺稿』所收の諸作を檢討すると、玉山は蘭亭に關わる詩二首おいてのみこの表現を用いていることが分かる。一首は「陪宇土侯宴高子式明月樓（宇土侯に陪して高子式の明月樓に宴す）」である。

峻嶒樓閣枕萱洲　峻嶒たる樓閣 萱洲に枕し
小隊風流載酒遊　小隊風流酒を載せて遊ぶ
好是連城明月色　好し是れ連城明月の色

夜深偏向使君投　　夜深くして偏へに使君に向けて投ぜん[52]

起句の「萱洲」は明月樓のあった茅場町をいう。承句の「小隊」は杜甫の「元戎小隊出郊坰、問柳尋花到野亭（元戎小隊 郊坰に出で、柳を問ひ花を尋ね野亭に到る）[53]」という詩句を踏まえ、ここでは宇土侯（細川興文）とその供回りを指している。結句の「使君」も宇土侯を指しており、轉結句は「連城明月」のような優れた詩篇を宇土侯に贈るのにちょうど良い機會だ――と述べている。「連城明月」は「明月樓」にちなんだ表現であり、玉山は「明月樓」と「明月珠」の故事を結び付けて認識していたことが分かる。

もう一例は蘭亭の死を悼んだ七律の連作に次のようにある。

逝矣山人一草堂　　逝く山人の一草堂
床頭詩卷動精靈　　床頭の詩卷 精靈を動かす
投珠終暗連城夜　　珠を投じて終に暗し連城の夜
掛劍偏寒處士星　　劍を掛けて偏に寒し處士の星[54]

「連城」は前引の秋元澹園の詩のように緣語的に用いられており、ここでは茅場町から望む江戸城を指していると考えられる。よって第三句は、「明月珠」のように光り輝く詩を作っていた蘭亭が逝去し、江戸城も夜の闇に包まれているといった意味であろう。

蘭亭と玉山は盛んに詩を應酬しており、「最も親しい詩友」の關係であったと評される[55]。玉山は、蘭亭の好む表現として、「明月珠」「連城璧」の連結表現を記憶しており、蘭亭に關わる詩においてそれを用いたのであろう。

四．おわりに

かつて日野龍夫は、徂徠學派は古人の詩文を模倣し、古人になりきることで、自己を安定した様式の中に「收束」させようとしていたと論じた[56]。詩文の制作の基底にある自己認識に光を當てた優れた議論である。

高野蘭亭と「明月珠」「連城璧」の連結表現の關係は、それとは異なる徂徠學派の人士の自己認識の在り方を示している。蘭亭は、古代の人物に自己をなぞらえることもあったが、それだけでなく自己を特定の表現と結び付けて捉え、その連關に基づいて詩想を膨らますことがあった。いうなれば、蘭亭は古文辭派の典據表現の體系の中に自己を定着させていたのである。

蘭亭以外にも服部南郭は、赤羽川の近くに居を構えたことから、『莊子』天地の「赤水玄珠」の故事をしばしば用い、彼の周圍の學者・文人の間では南郭といえば「赤水玄珠」という連想が共有されている[57]。

自己を特定の典據表現と連關させて生き、その連關とともに人々に記憶される――このような生の在り方にとって、同一表現の反復は自己と表現の連關を強固にするために缺かせない。性靈派などによる徂徠學派の詩を陳腐であるとする批判は、かかる生き方に對する否定でもあったといえよう。

注

（1）『唐詩選』の受容史については、有木大輔『唐詩選版本研究』（好文出版、二〇一三年）、大場卓也（編）『江戸人、唐詩選に遊ぶ――久留米大學文學部創立二十五周年記念特別企畫御井圖書館貴重資料展』（久留米

大學文學部、二〇一七年）參照。

（2）李攀龍「送吳郎中讞獄江西」第二首（荻生徂徠『絶句解』七絶上、三オ、延享三年刊）。『絶句解』はこの句に注して「李白句法（李白の句法）」という。

（3）李白「陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞庭湖」（李攀龍〔編選〕・服部南郭〔考訂〕『唐詩選』巻七、四ウ、寛保三年刊、早稲田大學圖書館藏）。

（4）熊阪台州『白雲館近體詩眼』（寛政九年刊、慶應義塾大學圖書館藏）。

（5）楊炯「夜送趙縱」（入江南溟『唐詩句解』五言絶句、一ウ、享保二十年序）。

（6）『史記』巻八十一、藺相如列傳。

（7）前掲『唐詩句解』五言絶句、一ウ。

（8）鄒陽「獄上書自明」（『文選』巻三十九、上書）。

（9）戸崎淡園『箋註唐詩選』巻六、二オ、天明四年刊。

（10）鈴木澶洲『撈海一得』巻下、二十五ウ、明和八年刊、慶應義塾大學圖書館藏。

（11）李攀龍「重別魏使君」（前掲『絶句解』七絶下、二十九ウ）。

（12）同右。

（13）同「寄茂秦」（前掲『絶句解』七絶上、十二オ）。

（14）『史記』巻七十六、虞卿列傳。

（15）『老子』下篇、七十章。

（16）他の例については、高山大毅「古文辭派詩の修辭技法――緣語掛詞的表現と名にちなんだ表現」（『國語國文』第八十九巻、二號、二〇二〇年）參照。

（17）太宰春臺「詩論附錄」、十二ウ（同『詩論』、安永二年刊、新潟大學附屬圖書館藏）。

（18）以下、『文選』巻一、賦甲。

（19）李白「繫尋陽上崔相渙」（李白〔著〕・王琦〔注〕『李太白全集』巻十一、六〇二頁、中華書局、一九七七年）。他には同「贈崔司戸文昆季」に「雙珠出海底、俱是連城珍（雙珠 海底より出で、俱に是れ連城の珍）」とある（同右、巻十、五三八頁）。ただし、このような表現は稀である。

（20）朱諫『李詩選注』（裴斐・劉善良〔編〕『李白資料彙篇 金元明清之部』、中華書局、一九九四年、二五二頁）。

（21）李攀龍『滄溟先生集』巻六、上海古籍出版社、二〇一四年、一六五頁。

（22）「中國基本古籍庫 Ver.7.0」（愛如生）

（23）『四庫全書總目提要』は『薛荔園集』について、「其詩以雄麗高峭爲宗、聲調氣格頗近七子。故王世貞贈詩云《以下略》（其の詩 雄麗高峭を以て宗と爲し、聲調氣格は頗る七子に近し。故に王世貞 詩を贈りて云ふ《以下略》）」と說く。

（24）同樣の例に王世貞らが用いる「歌中雪（歌中の雪）」という語がある。前掲「古文辭派詩の修辭技法」參照。

（25）本多猗蘭「懷子和」（同『猗蘭臺集』初稿、巻三、二十八オ、享保十七年刊、慶應義塾大學圖書館藏）。

（26）石島筑波「哭倉美仲」第二首（同『芰荷園文集』巻四、三ウ、明和七年跋、國文學研究資料館藏）。

（27）徂徠學派の詩の緣語掛詞的表現については前掲「古文辭派詩の修辭技法」參照。ちなみに南郭は大坂について「連城尙匿荊人璧、巨海曾通漢使船（連城 尙ほ匿す荊人の璧、巨海 曾て通ず漢使の船）」と詠じており、これも「連城」を城闕（大坂城）の意で用いていると考えられる（服部南郭「早春送人之泉南」（同『南郭先生文集』初編、巻四、三ウ、享保十二年刊〔日野龍夫〔編集・解說〕『南郭先生文集』、近世儒家文集集成第七巻、ぺりかん社、一九八五年〕）。

(28) 秋元澹園「懷江若水」(同『澹園初稿』巻中、三十ウ、享保十四年刊、國立國會圖書館藏)。
(29) 王世貞「答張幼于」(『國朝七子詩集註解』巻二、九ウ、延享四年刊)。この表現については前掲「古文辭派詩の修辭技法」で詳述した。
(30) 新井白石「錦里先生宴上和南南山韻」(同『白石先生餘稿』巻一、二ウ、正德五年序、早稻田大學圖書館藏)。
(31) 室鳩巣「別賦呈一座諸君」第五首(同『後編鳩巣先生文集』巻三、十三オ、寶曆十四年刊〔杉下元明〔編集・解說〕『鳩巣先生文集』、近世儒家文集集成第十三卷、ぺりかん社、一九九一年〕)。
(32) 「日本漢詩」第一輯〜第三輯(凱希メディアデータベース)を用例の檢出に利用した。左に紹介する三例以外の四例は次の通りである。高野蘭亭「秋日宇土侯鑑水亭雨集、懷大川上人」(『蘭亭先生詩集』巻三、十オ、寶曆八年刊、國文學研究資料館藏)、同「歲暮泉侯千秋館席上奉答見贈」(同右、巻六、三ウ)、同「明月樓集、贈菊庵禪師」(同右、巻六、十二ウ)、同「參議小倉公曾惠書及詩兼索拙稿。罹疾久矣。終無奉復。頃因肥藩秋文學東遊、復賜書輒賦此奉答」(同右、巻七、七オ)。蘭亭は生前に詩稿を自ら燒却したため、『蘭亭先生詩集』の收錄詩は完備したものではない。しかし、殘存した詩にこれだけの用例があることは、充分な指標となろう。蘭亭の傳記については、高橋昌彥「高野蘭亭傳攷」上下(『語文研究』第六十號、九州大學國語國文學會、一九八五年、同右、六十一號、一九八六年)參照。
(33) 横谷藍水「夏日從桃源越君過鳥山老侯幽居」(同『藍水詩草』巻三、二十一ウ、安永九年刊、慶應義塾大學圖書館藏)、同「答大公達病中見寄」(同右、巻四、十ウ)。
(34) 高野蘭亭「寄子祥」(前掲『蘭亭先生詩集』巻三、二十一オ)。
(35) 同「雨後登樓小酌得氷字」(同右、巻六、十オ)。
(36) 同「雨中丈卿昭德過明月樓得重字」(同右、巻八、一ウ)
(37) 同「卜居雜詠」第六首(同右、巻三、九オ)。
(38) 同「宇土侯凌霄閣」(同右、巻六、八ウ)。
(39) 荻生徂徠「贈高生」(同『徂徠集』巻七、十六ウ、元文五年刊〔平石直昭〔編集・解說〕『徂徠集　徂徠集拾遺』、近世儒家文集集成第三卷、ぺりかん社、一九八五年〕)。
(40) 干寶『搜神記』巻二十。『白孔六帖』巻七にも節略されてれた形で載る。
(41) 松崎觀海「東里先生壽藏記」(前掲『蘭亭先生詩集』附錄、一ウ)。
(42) 藤山惟熊「東里先生墓誌銘」(同右、附錄、四オ〜四ウ)。
(43) 高野蘭亭「奉答徂來先生見寄」(同右、巻九、一ウ)。
(44) 『韓非子』和氏を出典として『蒙求』などを介して良く知られた故事である。卞和が「陵陽侯」を辭した話は、『藝文類聚』(巻八十三、玉)所引の「琴操」などに見える。
(45) 荻生徂徠「滕煥圖字說」(前掲『徂徠集』巻十六、一オ〜二ウ)。
(46) 同「與下館侯」(前掲『徂徠集』巻二十、十六オ)。
(47) 劉義慶(撰)・何良俊(增)・王世貞(刪定)『世說新語補』巻十三、容止、十二ウ、萬曆十四年序、早稻田大學圖書館藏。
(48) 高野蘭亭「明月樓集贈菊庵禪師」(前掲『蘭亭先生詩集』巻六、十二ウ)。
(49) 同「石仲綠過訪明月樓、携詩見贈。不見仲綠已十餘年、話舊喜而爲答」(同右、巻六、十四ウ)。
(50) 同「得土準夫駿中書及詩答寄」第二首(同右、巻六、二ウ)。
(51) 同「題秋文學詩篇」(同右、巻二、九オ)。
(52) 秋山玉山「陪宇土侯宴高子式明月樓」(同『玉山先生詩集』巻六、五ウ、寶曆四年刊、國文學研究資料館藏)。本詩に關しては、「連城明月」

は「連城（璧）」「明月（珠）」を竝列しただけで、兩者を連結させた表現ではないという解釋もあり得よう。しかし、玉山は、注(37)に擧げた「卜居雜詠」第六首の表現などを念頭に置いていたのではなかろうか。

(53) 杜甫「嚴中丞枉駕見過」（邵傳〔集〕『杜律集解』七言卷上、四十五オ、元祿九年刊、早稻田大學圖書館藏）。

(54) 秋山玉山「哭高子式山人」第三首（『玉山先生遺稿』卷三、十五オ、安永三年序、早稻田大學圖書館藏）。第三句は難解で、第四句の「掛劍」と同じく、「投珠」の主語は玉山である可能性もある。蘭亭は松崎觀瀾の死を悼む詩で「明月連城失夜光（明月連城 夜光を失ふ）」いったように、「明月連城」が光を失うという表現を用いている（高野蘭亭「哭崎子允」、前掲『蘭亭先生詩集』、卷七、七ウ）。注(26)の石島筑波の詩も同趣向である。玉山のこの詩も同様の發想であると解釋した。

(55) 德田武『江戸詩人傳』、ぺりかん社、一九八六年、一七五頁。

(56) 日野龍夫「演技する詩人たち――古文辭派の詩風」（同『江戸の儒學』、日野龍夫著作集第一卷、ぺりかん社、二〇〇五年）。學者・文人の自己認識の問題をめぐっては島田英明『歷史と永遠――江戸後期の思想水脈』（岩波書店、二〇一八年）が示唆に富む。

(57) 南郭の諸作は、服部南郭「赤水春興」三首（同『南郭先生文集』二編、卷三、九オ、元文二年刊〔前掲『南郭先生文集』〕）、同「中秋獨酌」（同『南郭先生文集』三篇、卷三、延享二年、十三ウ〔前掲『南郭先生文集』〕）など。同樣の趣向の南郭以外の人物の詩には、石島筑波「九日早過芙蕖館賦奉南郭先生」（前掲『芰荷園文集』卷三、十四オ～十四ウ）、千葉芸閣「哭南郭服先生二首」（同『芸閣先生文集』卷三、七オ、安永六年刊、國立國會圖書館藏）、秋山玉山「芙蕖館看花留別服子遷」（前掲『玉山先生遺稿』卷三、八オ）がある。

＊漢詩文の引用に際し、文意を鑑み、板本の返り點・送り假名に從わなかった箇所がある。所藏機關を明記していない江戸期の板本は架藏本を用いた。本稿はJSPS科研費20K12910（「古文辭派詩の新研究」）の成果の一部である。